

太宰 治著述一覽稿(Ⅲ)

— 自昭和十一年 至昭和十三年 —

山 内 祥 史

めくら草紙・新潮・新年特大号、第三十三年第一号・昭和十一年一月一日発行・104頁・「創作特輯二十篇」欄

『晩年』(砂子屋書房、昭和十二年六月二十五日)に、全文が収載された。

『晩年——太宰治第一短篇小説集——(第一小説集叢書)』(砂子屋書房、昭和十六年七月十日)に、全文が収載された。

『玩具(あづみ文庫)』(あづみ書房、昭和二十一年八月十日)に、全文が収載された。

『晩年(新潮文庫)』(新潮社、昭和二十二年十二月十日)に、全文が収載された。

『晩年——太宰治代表作集——』(新潮社、昭和二十三年七月三十日)に、全文が収載された。

『太宰治全集第一巻晩年』(八雲書店、昭和二十三年九月一日)に、全文が収載された。

『同時代評』川端康成「文芸時評(2)——松飾り式短篇——」(「中外商業新報」第一七九三八号、昭和十年十二月二十八日)には、つぎのように記されている。

「新潮」は初春の吉例により、主に若い作家の小説を二十篇並べてゐる。年賀状か松飾りのやうなものである。先達て「中央公論」の五十周年記念号には、文士の祝賀提燈行列みたいに、やはり二十枚前後の小説を三十幾篇並べ

た。この記念号はよく売れたさうである。文壇外の私の知人二、三も、現代文学の早分り読本、見本帳として買ったといふ。そして失望したといふ。尤もな次第である。／この時の雑誌の企てや、作家を辯護する言葉を、私は持たぬ。学校の作文の時間みたいに、お揃ひの短いものを書かせるが無理なのは、分り切つてゐる。しかし、これは浅墓な逃げ口上に過ぎぬ。いかになぐり書きの寸簡零墨にも、その人の持つだけの文学的価値は現れると、私はこの頃いよいよ痛感する。不用意な日常談話の片言隻語にも、その人の人格がうかがへると同じである。果して「新潮」の新作家見本市は、街の祭提燈のやうに目新しいであらうか。／「文士は喰はねど高いびき」とは、「文芸」の匿名寸評欄のしやれだが、なかなか穿つてゐる。新作家の「極端な窮乏生活」は、「その困窮に社会的根拠が乏しく、普遍性を飲いてゐるからだ。」確かにさうである。大観すればその通りである。しかし、これを素直にうなづいて引きさがる新作家は、恐らく一人もあるまい。社会的根拠の「ない」困窮などあり得ぬ。それが「乏しく」見えるのも、多過ぎることの逆の現れとも云へる。また「普遍性を飲いた」個人の生活などは、文学の世界にはあり得ぬと云へる。そして「普遍性を飲む」ほど独自に生き、考へてゐるなら、大いに頼もしいが、先づその反対だから、心細いのである。「高いびき」どころではない。風そよぐ葦のやうで、満足な寢息も減多に聞けぬ。同じこと別の面を武田麟太郎氏はみごと一掴みして云ふ。「プロレタリア文学以後私小説と云つてゐるのは昔からの私小説でなくて、實際或る社会を描くと敢て云つて、しかも力足らずして描けなかったギャップの反動として、即ち凡ゆる社会苦に還元してみたのが（私小説）だよ。」（「文学界」座談会）／いかにも「新潮」の小説二十篇のうち、大半が武田氏の云ふやうな「私小説」である。自分の窮乏生活を扱つたのは少いが、どれにも時代の陰は重く「高いびき」どころでない。例へば尾崎氏の「俠客」は虚無によつて、この陰を貫かんとし、伊藤整氏の「葡萄園」阿部知二氏の「幻影」などは野性の生活力によつて、この影から浮ばうとし、太宰治氏の「めくら草紙」は、この陰のまた陰の光のうつろひを歌はうとするが、いずれも後髪を掴まれてゐる。さうして、この陰に頭から文句な

しに、弱く参つてゐるその他の若干の作品が、最もつまらなく見えるといふことは、この際我等の深く考ふべきことである。更に深く考ふべきことが、ここにある。それは、二十篇中、私に最も強い感銘を与へたばかりでなく、最も確に現実を捉へ、また明かに最も傑れてゐるのは、島本健作氏の「金魚」と平林たい子氏の「女の街道」とであるといふことだ。プロレタリア作家の作品であるといふことだ。

古谷綱武「新年初頭文壇を観る」(「文芸通信」第四卷第二号、昭和十一年二月一日)には、つぎのように記されている。

新潮所載の太宰氏の「めくら草紙」は、太宰氏最近作品中出色のものと信じます。この得がたい作家の得がたく美しい短篇小説と思ひます。

古谷綱武「文芸時評―病床覚え書―」(「作品」第七卷第二号、昭和十一年二月一日)には、つぎのように記されている。

今月は私のプランでは、ふたりの傑れた作家を論じる予定であつた。武者小路実篤氏と太宰治氏である。例月より、この原稿のべ切が十日早く、新年号の雑誌を未だ殆んど読んでゐないのであるが、読んだ範囲では、武者小路氏の「彼の日常生活」(中央公論)と太宰氏の「めくら草紙」(新潮)が出色の美事さで、私はこころうたれた。(略)太宰治氏についても、私は是非書きたいし、書かねばならぬと思つてゐる。昭和八年三月創刊された六十頁ほどの同人雑誌に「海豹」といふのがある。その創刊号の巻頭に「魚服記」といふ小説がある。僅か十六枚の短篇小説であるが、その作品に私の心は深く捕へられた。それ以来、私はこの作家を愛読しつづけてきたのである。時評家の私は、この作家を論じる機会をねらつてゐたのであるが、最近発表した二作は、私が讃歌を書き綴るには不服な作品であつた。しかし今度の「めくら草紙」はいい。単に外形的なことだけいっても、短篇小説本来の型が、ずいぶん崩されながら、しかも崩されてゐない。短篇小説の形式美が生きてゐる。崩れて崩れてゐないのは内

容の確かさである。最近に太宰氏の短篇小説集「晩年」が上梓される。私はその内容を知ってゐるが、恐らく近來これほど充実した短篇集が刊行されたことはないだらうと信ずる。／武者小路実篤氏と太宰治氏を論じるのを、急に取りやめたのは、編輯部から注文を出されたからである。本誌の新人コンクールに因んで新人論を書けといふのである。（略）

「付記」「新潮」新年特大号の「めくら草紙」には、「なんにも書くな。なんにも読むな。なんにも思ふな。ただ、生きて在れ！」のサブ・タイトルが付されている。

作家の生活に対する構へ、覚悟。・新潮・新年特大号、第三十三年第一号・昭和十一年一月一日発行・206～207頁・「作家としての心構へ・覚悟（回答）」欄

山内祥史「太宰治『作家生活に対する構へ、覚悟。』・ほか―太宰治と保田与重郎をめぐって―」（『近代文学試験』第六号、昭和四十三年十二月十五日）に、全文が紹介された。

山内祥史著『太宰治（近代文学資料4）』（桜楓社、昭和四十五年六月五日）所載「『作家の生活に対する構へ、覚悟。』・ほか―太宰治と保田与重郎をめぐって―」に、全文が紹介された。

「同時代評」保田与重郎「川柳永遠勝利説」（『日本浪漫派』第二巻第二号、昭和十一年二月一日）には、つぎのように記されている。

「新潮」一月号が作家生活への覚悟を問ふてきたのに対し、僕は疾風迅雷には襟を正すといふ古言を以て答へた。あの回答二十名に垂んとしてゐたか、中で文学への覚悟を語ったのは太宰治一人であつたと見える。本当に世渡りの秘訣は節度であるか、僕は又々このテーマたる川柳永遠勝利説にめぐりあつて了つた。僕は作家でないくせに、二十名の仲間入りして文学生活への覚悟を語ってきざっぱいことかいてゐる。だが太宰治だけは文学へのかない覚悟をかいてゐる。僕は川柳永遠勝利説論者にうちかつたために、今日のもつ滑稽な莊嚴さにまで僕らの

はかない芸術を高めねばならないのか鎮守祭りの力持曲芸をみせねばならないのか。僕らのはかない文学への覚悟など、ローマの格闘士よ早く骨の髄までくだいてくれるがよい。

〔付記〕全集未収録。「新潮」新年特大号の「目次」には、「作家としての心構へ・覚悟（回答）」とあり、本文には、「作家としての心構へ・覚悟」の総題のもとに、それぞれ無題で、平田小六、外村繁、島木健作、中村地平、保田与重郎、石川達三、福田清人、丸岡明、張赫宙、永松定、三上秀吉、北川冬彦、豊田三郎、太宰治、丹羽文雄、伊藤整、寺崎浩、真船豊、徳田一穂、田村泰次郎、那須辰造、荒木巍、新田潤の諸文章が所載されている。なお、太宰治の文章の末尾には、「以上、『新潮』編輯者のお言ひつけの『作家の生活に対する構へ・覚悟。』といふ題にて。（『もの思ふ葦』より。）」と記されている。

もの思ふ葦・作品・新年号、第七巻第一号、通巻六十九号・昭和十一年一月一日発行・136～139頁

『もの思ふ葦太宰治全集第十六巻（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文が収載された。

〔付記〕「作品」新年号には、「葦の自戒」136頁、「感想について」137頁、「すらだにも」137頁、「慈眼」138頁、「重大のこと」138～139頁、「敵」139頁と、所載されて、文末に「追記。」が付されている。なお、「追記。」でふれている今官一「海鷗の章」は、「作品」の昭和十年十二月号（第六巻第十二号）「小説」欄、昭和十年十二月一日）と、昭和十一年一月号（第七巻第一号、昭和十一年一月一日）とに所載されたが、そのまま以後「作品」には所載されていないようである。

もの思ふ葦・文芸通信・一月号、第四巻第一号・昭和十一年一月一日発行・20～21頁・「作家の感想」欄

『もの思ふ葦太宰治全集第十六巻（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文が収載された。

〔付記〕「文芸通信」一月号には、「健康」20頁、「K君」20頁、「ボオズ」20頁、「絵はがき」20頁、「いつはりなき申告」20頁、「乱麻を焼き切る」20～21頁、「最後のスタンドプレイ」21頁と所載されて、文末に「以上。」と

ある。

もの思ふ葦・文芸汎論・新年号、第六卷第一号、通巻五十三冊・昭和十一年一月一日発行・92頁・「小説」欄

『もの思ふ葦太宰治全集第十六卷（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文が収載された。

〔付記〕「文芸汎論」新年号には、「冷酷といふことについて」92頁、「わがかなしみ」92頁、「文章について」92頁、「ふと思ふ」93頁、「Y子」93頁、「言葉の奇妙」93頁、「まんざい」93頁、「わが神話」93頁94頁、「最も日常茶飯的なもの」94頁、「蟹について」94頁、「わがダンディズム」94頁と、所載されている。

もの思ふ葦・文芸雑誌・一月、創刊号、第一巻第一号・昭和十一年一月一日発行・58頁61頁

『もの思ふ葦太宰治全集第十六卷（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文が収載された。

〔付記〕「文芸雑誌」創刊号には、「『晩年』に就いて」58頁59頁、「気がかりといふことに就いて」59頁60頁、「宿題」60頁と所載されて、文末に「附記。」が付されている。

人物に就いて・東奥日報・第壱万五千五百八十七号・昭和十一年一月一日・22面

『太宰治全集第十卷』（筑摩書房、昭和三十一年七月二十日）に、全文が収載された。

〔付記〕「東奥日報」の「人物に就いて」の文末には、「（十一月二十三日しるす）」とあり、さらに、「〔編輯者〕の「附言」として、「十一月二十五日小館保治郎氏の計報あり、この稿はその前にしるされたものである」と記されている。

碧眼托鉢（一）・日本浪曼派・一月号、第二巻第一号・昭和十一年一月一日発行・70頁73頁

『信天翁——太宰治文藻集——』（昭南書房、昭和十七年十一月十五日）に、全文が収載された。

『太宰治随想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文が収載された。

『もの思ふ葦太宰治全集第十六卷（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文が収載された。

〔付記〕「日本浪漫派」一月号の「碧眼托鉢（一）」には、「（馬をさへ眺むる雪の朝かな）」のサブ・タイトルが付されている。なお、同誌には、「ボオドレエルに就いて」70頁、「ブルジョア芸術に於ける宿命」70頁、「定理」70頁、「わが終生の祈願」70頁71頁、「わが友」71頁、「憂きわれをさびしがらせよ寒苦鳥」71頁、「フィリップの骨格について」71頁72頁、「或るひとりの男の精進について」72頁73頁、「生きて行く力」73頁、「わが唯一のをのき。」73頁と、所載されている。また文末には、「（今月は、九枚、書いた。来月は十枚を、らくに書ける。）」とある。

碧眼托鉢（二）・日本浪漫派・二月号、第二巻第二号・昭和十一年二月一日発行・103頁104頁

『信天翁——太宰治文藻集——』（昭南書房、昭和十七年十一月十五日）に、全文が収載された。

『太宰治随想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文が収載された。

『もの思ふ葦太宰治全集第十六巻（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文が収載された。

〔付記〕「日本浪漫派」二月号の「碧眼托鉢（二）」には、「マンネリズム」103頁104頁、「作家は小説を書かなければいけない。」104頁、「挨拶」104頁と、所載されている。

碧眼托鉢（三）・日本浪漫派・三月号、第二巻第三号・昭和十一年三月一日発行・82頁83頁

『信天翁——太宰治文藻集——』（昭南書房、昭和十七年十一月十五日）に、全文が収載された。

『太宰治随想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文が収載された。

『もの思ふ葦太宰治全集第十六巻（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文が収載された。

〔付記〕「日本浪漫派」三月号の「碧眼托鉢（三）」には、「立派といふことに就いて」82頁、「Confiteor」82頁83頁、「頽廃の児、自然の児」83頁と、所載されている。

陰火・文芸雑誌・四月号、第一年第四号・昭和十一年四月一日発行・6頁23頁・「創作」欄

『晩年』（砂子屋書房、昭和十一年六月二十五日）に、全文が収載された。

『晩年——太宰治第一短篇小説集——（第一小説集叢書）』（砂子屋書房、昭和十六年七月十日）に、全文が収載された。

『晩年（養徳叢書05）』（養徳社、昭和二十一年四月二十日）に、全文が収載された。

『晩年（新潮文庫）』（新潮社、昭和二十二年十二月十日）に、全文が収載された。

『花燭』（思索社、昭和二十三年一月二十五日）に、全文が収載された。

『晩年（太宰治代表作集）』（新潮社、昭和二十三年七月三十日）に、全文が収載された。

『太宰治全集第一巻晩年』（八雲書店、昭和二十三年九月一日）に、全文が収載された。

『同時代評』伊藤整「文芸時評」（『文芸』第四巻第五号、昭和十一年五月一日）には、つぎのように記されている。

文芸雑誌で太宰治氏の「陰火」といふ連作のやうな作品を読み、そのせつちかなひねくれ方に作家としての自己の執着を見、この人もまた自分だけの考で立たうとしてゐると思つた。ことに太宰氏などは不具の感じで、小説を如何に投げるかといふことを面白がつてゐた。小説にのみ人間の全体を見てゐる作家の多いなかで、この細い一本の若木には目立っていいだけのものがある。だが太宰氏のやうな否定精神だけでは物事が成り立つとはどうして思はれない。

『付記』「文芸雑誌」四月号には、「誕生」6～11頁、「紙の鶴」10～14頁、「水車」14～17頁、「尼」17～23頁と、所載されている。なお、同誌巻頭には、「『晩年』の著者太宰治氏」と題する写真と文章が所載され、また、「太宰治を語る」の特集には、佐藤春夫「尊重すべき困った代物——太宰治に就て——」、井伏鱒二「太宰君」、保田与重郎「佳人水上行」、檀一雄「おめざの要る男」の諸文が所載されていて、巻末の「編輯後記」には、つぎのやうに記されている。「今月号の創作欄は、だが大雑誌にも劣らぬ自慢してもいい充実振りである。瑰麗な太宰治氏の作品は四十枚の力作であるし、川崎長太郎、宮内寒弥氏の作品も、夫々得意な材料を取扱って成功してゐる佳篇

である。又、丹羽文雄氏の長篇『一色淑子』は今月で終ったが、丹羽氏は最後まで張り切って策を進めてゐる。／
今月は諸家に太宰治氏に就いて語って貰った。佐藤春夫、井伏鱒二、保田与重郎、壇一雄諸氏の名文章は、鬼才太
宰治氏の人及び芸術を伝へて遺憾ないやうである。又諸家の文章自身にも、夫々の面目が躍如してゐて、その意味
でも興味深い読物であると信じる。」

雌に就いて・若草・五月号、第十二巻第五号・昭和十一年五月一日発行

『二十世紀旗手（版画荘文庫4）』（版画荘、昭和十二年七月二十日）に、全文が収載された。

『信天翁―太宰治文藻集―』（昭南書房、昭和十七年十一月十五日）に、全文が収載された。

『太宰治全集第三巻二十世紀旗手』（八雲書店、昭和二十三年七月三十一日）に、全文が収載された。

『付記』未確認。所載頁は不明である。初出を「若草」昭和十一年五月号と推定しうる理由については、拙稿「『二十世紀旗手』の書誌」（『日本文学』第十九巻第六号、昭和四十五年六月一日）を参照されたい。なお、初出にも、つぎのようなプロローグが付されていたものと、思われる。「フキジー人は其最愛の妻すら、少しく嫌味を覚ゆれば忽ち殺して其肉を食ふと云ふ。又タスマニヤ人は其妻死する時は、其子までも共に埋めて平然たる姿なりと。濠洲の或る土人の如きは、其妻の死するや、之を山野に運び、其脂をとりて釣魚の餌となすと云ふ。」

古典龍頭蛇尾・文芸懇話会・五月号、第一巻第五号、「川端康成編輯号」・昭和十一年五月一日発行・57頁・「特輯『日本古典文芸と現代文芸』」欄

『信天翁―太宰治文藻集―』（昭南書房、昭和十七年十一月十五日）に、全文が収載された。

『太宰治随想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文が収載された。

『もの思ふ葦太宰治全集第十六巻（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文が収載された。

『同時代評』林房雄「文芸時評―洒落及び冗談論―」（『文芸春秋』第十四巻第六号、昭和十一年六月一日）には、つぎのよ

うに記されている。

日本人は、もともと朗らかで楽天的な国民だと言はれてゐる。文学史を眺めて見ても、古来、酒落や冗談の偉作にとほしくない。だとすると、鹿瓜らしい顔をして、酒落及び冗談を排斥する現代の「純文学」なるものは、思ふに非国民どもの文学か？——人民がふりむかうとしないのは当然である。／そこで、日本浪漫派の少壮、太宰治が義憤を發し、雑誌「文芸懇話会」で、曰く、／「日本文学は、たいへん実用的である。文学報国、兩乞ひの歌がある。ユモレスクなるものと遠い。国体のせいである。日本刀をきたへる氣持で文を草してゐる。一筆三拝。」／「文章を無為に享樂する法を知らぬ。やたらに深刻をよろこぶ。ナンセンスの美しさを知らぬ。小理窟が多くて、たのしくない。お月様の中の小兎をよろこばず、カチカチ山の小兎を愛してる。カチカチ山は仇打ち物語である。」／なるほどだが、太宰治よ、あまり怒るな、かかる現状は必しも国体のせいばかりではないらしい。主として現代作家が馬鹿野郎のせいである。馬鹿につける薬を目下、理化学研究所が發明中ださうだからいづれ癒るだろうさ。

悶々日記・文芸・六月号、第四卷第六号・昭和十一年六月一日発行・129～131頁・「文学的な・文学的な」欄『もの思ふ葦太宰治全集第十六卷（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文が収載された。

虚構の春・文学界・七月号、第三卷第七号・昭和十一年七月一日発行・2～60頁

『虚構の彷徨、ダス・ゲマイネ（新選純文学叢書）』（新潮社、昭和十二年六月一日）に、「虚構の彷徨(3)」として、全文が収載された。

『狂言の神（三島文庫）』（三島書房、昭和二十二年八月三十日）に、全文が収載された。

『太宰治全集第二卷虚構の彷徨』（八雲書店、昭和二十三年四月二十日）に、全文が収載された。

（同時代評）室生犀星「文芸時評」（「文芸春秋」第十四卷第八号、昭和十一年八月一日）には、つぎのように記されてい

る。

たとへば「虚構の春」(文学界)に於ける太宰治氏と「猫と庄造と二人の女」(改造)に於ける谷崎潤一郎氏とには、明かに爛熟後期の作家の沈着と、潤達縦横な気鋭の作家の違いが、斯くも甚しく違つてゐるのに驚くくらいである。太宰治氏の「虚構の春」は巫山戯切つた人を莫迦にした作品だといふ人もゐたが、私は却つてこのなかにこそ夥しい傷みやすい若い作者の心が読まれたくらゐである。総じて二十代から三十代へかけては書くことが頭の中に汎濫してゐて、拾取すべからざる状態のものである。尠くとも作家として立たうとする人びとは大抵この時代には見当外れの、小説や何やら一向に分らないものが、何時の間にか一種の小説を書かしてゐるのが常である。「小説を書けない小説家」の作者である中野重治氏とくらべて見れば、中野氏よりずっと若く一層小説の入口で手に一杯の荷物を提げてゐる太宰治氏が、その小説の入口一杯にからだがつかへてそのまま立往生してゐるやうな姿を見出すのである。／(略)／處女作前後に於ける作家の構へといふものは、何でも彼でもやんちゃづくめであつて、何か眼新しく人びとを煙に捲かうという華やかな野心勃勃の時代である。さういふ野心を刺戟する才能の汎濫が時に変挺子な作品を書かして了ふものだ。私などにもその変挺子な小説だか鉛筆画だか訳の分らないものを書いた時代があつたが、その時分にはさういふ異体の分らないものを書いて居ればいいのであらう。／「三田文学」による丸井栄雄氏も鳥渡風変りな変挺子な、変挺子であるために独特な小説を書いてゐたが、近頃はきちんと姿を更めてゐた。太宰治氏もかういふ変挺子な我儘な、いまに気恥かしくなるやうな小説は書かなくなるであらうが、それをさうしないでこの調子で太宰治文学を押し建てて行かれるなら、敢て益々この調子でいいのである。萩原朔太郎氏の初期の詩も北原白秋氏の「邪宗門」もともに当時にあつて変挺子な風変りなものであつた。今日でさへ多少風変りでさへあつた。併乍、これらの作者は風変りも一刻に過ぎなかつたのである。太宰治氏ばかりではなく、もっと広く凡ゆる汎濫された才能の遣場のない若い時代には、それを矢鱈につかつて見てもいいのであらう、

つかはないよりも勇ましくさへある。

谷崎精二「文芸時評」(「早稲田文学」第三卷第八号、昭和十一年八月一日)には、つぎのように記されている。

『文学界』では太宰治氏の『虚構の春』を読んだ。第一に冗漫の感じを受ける。無論作者は冗漫を意識してかうした形式を執ったのであらうが、冗漫な形式の中からやむにやまれぬ何物かが沸騰し、迸出してゐるならいいが、此の冗漫は一つの技巧として使はれてゐるだけで内容は平凡である。六十頁の此の作を読んで徒勞を感じた。おそらく此の作者としても自信のある作ではあるまい。次ぎの力作に期待しよう。

森山啓「文芸時評」(「新潮」第三十三年第八号、昭和十一年八月一日)には、つぎのように記されている。

湯浅克衛氏の「移民」(改造七月)は、今日の新人の作品のなかでは尊重したい力作の一つだ。(略)／かういふ作品と太宰治氏の「虚構の春」(文学界七月)とは、新人のものとして対照的である。この放埒には手がつけられぬ、といふところを意識してやって見せてゐるのだから困りものだ。われわれには、手堅くまとまって別に新味もない作品や、新聞の卑俗小説を書くかたはら申訳に書いた創作を読んだ揚句には、思ひ切つてハメをはづしたものを讀みたくなる気持もあるのだが、「虚構の春」の道化には途中で退屈させられる。作中に「なにひとつ真実を言はぬ、けれども、しばらく聞いてゐるうちには思はぬ拾ひものをする」ことがある。彼等の氣取つた言葉のなかに、ときどきびっくりするほど素直なひびきの感ぜられることがある」といふ言葉があるが、これとて嘘八百の言葉の中の一つである。／いろいろな安文句でもって、「真実」や「現実」を不可知なものとするのは今日の一部新進作家達における流行で、これについては村山知義が「文学案内」七月号の時評や、新潮七月号の「小説の問題に就いて」の座談会で善く扱つてゐる。ただ認識論上の疑惑が今更かれらの内心に起つてゐると見るなら、かれらに一杯食はされることである。内心では対象世界の实在性も信じ、その認識の可能性も知つてゐながら、あんなことを言つて見たい心理が問題である。

秋沢三郎「太宰治の『虚構の春』」(「文学生活」第一卷第四号、昭和十一年九月一日)には、つぎのように記されている。

太宰治の「虚構の春」を読んで面白かった。この作の出来、不出来は色んな人たちから太宰治にあてた手紙を集めた形式になってをりその手紙の中には実際そのまゝのもあるといふことなので、批評するとなると戸惑ふが、とに角面白く、遺憾なく太宰治色を満喫した。／太宰といふ男はなんといふ男だらう。なんとまあ虚栄心の強い男だらう。まるで女だ。才気に自信のある、何より容貌自慢の、何かにつけて「あたしの顔、あたしの顔」で、自分の顔に病的な虚栄心をもつ、その虚栄心の故に張りのある女太宰治がさういふ女そっくりに僕にはおもへた。／かういふ虚栄心は誰でももつてゐる。太宰治のやうに百％旺盛な男も随分多いのだ。そして明らかにヤクザな、どうにもならない軽蔑される性質なのだ。それがどうだらう。太宰治の場合は、もはやさう簡単に軽蔑するだけでは済まないのだ。大げさにいへば、さういふ性格が、太宰の文学を俟って、はじめてわれわれにその明確な存在を示した、彼の文学を通して、はじめて生き得た、といふ気がするのだ。嘉村礒多の場合もこれと同様だ。彼に似た、律気な小心な、そのくせ依怙地な人間は随分多い。そんな人達は嘉村礒多の小説を見て、はじめてかういふ作家の個性もあり得たのかと、徒に今まで自己のさういふ性質を耻じてばかりゐたのに、更に改めて後悔の念をおぼへたのだ。／太宰治自身、このことは、むしろ自覚しすぎるとおもはれるほど大げさに自覚してゐる。／「私たちの作家が出たといふことはうれしいことです。苦しくとも生きて下さい。あなたのうしろには、ものが言へない自己喪失の亡者が十萬うようよとして居ります。日本文学史に私たちの選手を出したといふことはうれしい。雲霞のごときわれわれに表現を与へてくれた作家の出現をよろこぶものでございます。」(「文学界、七月号・四九頁」)／嘉村礒多、太宰治のやうに、こんなふうな、ある性格、世にさらにあり、しかも軽んじられてゐる性格の立派な代辨者となりおほせること、これこそ作家の個性でなくてなんであらう。これこそ作家として誇つてよい立派な個性だ。僕

はかういふ個性を見せつけられるごとに、既に云ひ古された作家の個性尊重といふことを、今更のやうに改めてつくづく考へさせられるのだ。／彼ら二人が代表する性格の外にも、まだまだこの世には何種類となくヤクザな性格がうようよあり、さういふ性格のもので文学に志してゐるものも少くないのだ。がそれらはまだこの世にハッキリしたその代辨者を持つていたつてゐないのだ。実際、嘉村、太宰の書いたものを見れば「なんだ、こんなことまで書いて」と容易く云ひ去つてしまふこともできやう。がさて、自分でやってみるとどうしてなかなか至難なことなのだ。小心者、虚栄心の強い者が、自分の本当の小心、虚栄心の底の底まで吐きつくすといふことは、決して他から考へるほど生やさしいことではないのだ。そこには、単に自己の性格に徹するといふだけのものでなく、自分にも訳のわからぬ熱情自信があつて、はじめてこのことがなしとげられるのだ。それがエスプリといふものだ。この点僕はさきに、太宰治をまるで虚栄心の権化みたいにいゝたが、事實はただ彼が誰よりも自己のさういふ性質を鋭く意識せずにはをられぬといふことなのかもしれない。ここにまた彼の作品にみる著しい誇張の生れる根拠もひそんでゐるのだらう。僕は嘉村磯多の小説を読んだときにも、何よりもまづその表現の誇張に驚いた。誇張してはじめて生気を放ち躍動する作家。実際誇張せずにはどうしても表現できぬといふ場合もあるものだ。そして僕はさういふ作家が羨ましくなることがある。

深田久彌「創作」（『文芸』第四卷第十二号、昭和十一年十二月一日）には、つぎのように記されている。

太宰治「虚構の春」——これだけ人を騒がせる作家は、それだけにても既に一存在なり。人々は悪口は云ふが徹底的に黙殺し得ない点がこの作者の強味である。新人はまさに斯くの如くあるべし。

走ラヌ名馬・工業大学蔵前新聞・昭和十一年七月二十五日発行

『もの思ふ葦太宰治全集第十六卷（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文が収載された。

〔付記〕未確認。号数、所載面等は、不明である。

「晩年」自讃・文筆・創刊号、第一巻第一号・昭和十一年八月一日発行・45～46頁

『もの思ふ葦 太宰治全集第十六巻（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文が収載された。

〔付記〕「文筆」創刊号には、中村地平「『晩年』の讃」と、山岸外史「太宰治の短篇集『晩年』を推薦する」とが所載されており、同誌の「後記」には、「今度仲町貞子氏の第一短篇小説集『梅の花』と、太宰治氏の同じく第一短篇小説集『晩年』とを上梓いたしました。さひはひどちらも好評を得ましてしあはせに存じてをります。」と記されている。なお、「『晩年』自讃」は、「もの思ふ葦」（『文芸雑誌』創刊号、昭和十一年一月一日）の「『晩年』に就いて」の裡から、「私は、信じて居る。……いまの世のまことの美の実證を、この世にのこさむための出版也。』」の部分で、抜萃したものである。

狂言の神・東陽・十月号、第一巻第六号・昭和十一年十月一日発行・127～139頁・「創作」欄

『虚構の彷徨、ダス・ゲマイネ（新選純文学叢書）』（新潮社、昭和十二年六月一日）に、「虚構の彷徨(2)」として、全文が収載された。

『狂言の神（三島文庫）』（三島書房、昭和二十二年八月三十日）に、全文が収載された。

『太宰治全集第二巻虚構の彷徨』（八雲書店、昭和二十三年四月二十日）に、全文が収載された。

〔同時代評〕佐藤春夫「芥川賞―憤怒こそ愛の極点（太宰治）―」（『改造』第十巻第十一号、昭和十一年十一月一日）には、つぎのように記されている。

「狂言の神」といふ題のこの原稿は、数年前情死を企ててその相手だけを死なせた男が、数年前の海岸へひとり来て、ふと死神に襲はれたやうな気持であと追心中を遂げようと、死処を求めて彷徨する間に平和な家庭を持ってゐる先輩を訪うて決心を鈍ぶらせられたりするが、遂に林間に入って樹の枝にぶらさがるが枝が折れて地に墜ちて失神しただけで終るといふ程の筋で言はば道化の華の続篇とも見るべきものではあるが、推賞するに足る出来栄を

示し、その泣き笑ひに真剣なものが見られるのに感心し、これならば雑誌東陽の編輯を司る富沢有為男に事情を述べて相談すればその価値をも認めるだらうし、長さも適当らしいと考へた。先づこの事を述べて太宰を喜ばせてから四十八枚のうち作家が苦にしてゐるやうな事を口では言つてゐるが実は案外得意だらうと思ふ書き出しはいいけれども最後の二枚は蛇足だから割愛した方が余情が多からうと意見を述べると太宰は無邪気に限りなく喜んで万事を自分に依頼して歸つた。さうして富沢もこの作の価値を認め編輯同人も佳作を得たのを喜んでゐるが、但発行日の早い東陽は既に八月、九月号の編輯の予定は決定してゐるから十月に喜んで採用するといふ話が出来、これを作者に自分から知らせると、「……待テバ海路ノ日和。千羽鶴。箋着タ亀……」などの文句のあるはがきで喜んで来た。このはがきもあの作者を喜んでゐる編輯同人に見せたいといふ富沢に渡してしまつた。引用の文句は記憶に残つてゐるところである。

〔付記〕「東陽」十月号の「狂言の神」には、「なんぢら断食するとき、かの偽善者のごとく悲しき／おもち面容をすな。

（マタイ六章十六。）」のサブ・タイトルが付されている。

創生記・新潮・十月号、第三十三年第十号・昭和十一年十月一日発行・219頁・234頁・「創作」欄

『信天翁—太宰治文藻集—』（昭南書房、昭和十七年十一月十五日）に、「山上通信」の部分が削除されて収載された。

『太宰治全集第三卷二十世紀旗手』（八雲書店、昭和二十三年七月三十一日）に、「山上の私語」からあと全部脱落した形で収載された。

『雌に就いて—太宰治選集—』（杜陵書院、昭和二十三年八月五日）に、「山上通信」の部分が削除されて収載された。

『二十世紀旗手太宰治全集第三卷（近代文庫69）』（創芸社、昭和二十八年六月一日）に、全文が収載された。

〔同時代評〕中條百合子「文芸時評〔五〕—十月の諸雑誌から—封建風な徒弟氣質—」（「東京日日新聞」第二万二千六百十二号、昭和十一年九月二十七日）には、つぎのように記されている。

芥川賞を得た小田嶽夫、鶴田知也「二新人に訊く」といふ題で「三田新聞」に小田嶽夫氏の書いてゐる文章をよみ、それと腹合はせに「創生記」（太宰治・新潮）を読み、私は鼻の奥のところに何ともいへぬきつい、苦痛な酸性の刺激を感じた。昔の人は酸鼻といふ熟語でこの感覚を表現した。更に「地底の墓」（打木村治・文芸春秋）「落日の饗宴」（横田文子・文芸春秋）とを読み、いくつかの「新人論」を瞥見し、私は、文学に、何ぞこの封建風な徒弟気質ぞ、と感じ、更に、そのやうな苦衷、或は卑屈に似た状態におとしめられてゐることに對して、ヒューマニズムは、先づ、文学的インテリゲンツィアをゆすぶって、憤りを、憤るといふ人間的な權利をもつてゐるのであるといふ自覚を、呼びさますべきであると思つたのであつた。新人として推薦され、人前に立つと、その顔に向つていやこれは違ふ、本當に新しいとはいへぬといふ声が正面から発せられ、しかも、推薦者はそれに対して沈黙するか、悪い場合には、いや、実は新しいんでないことは分つてゐたんだ、と力無く呟きかねない。いはゆる新人にとつても、傍からそれを目撃するものにとつてもこれは堪へるに容易でない一つの愚弄である。

坂口安吾「文芸時評五―新人の作品―」（「都新聞」第一七五六号、昭和十一年十月一日）には、つぎのように記されている。

太宰治氏の「創生記」（新潮）、なるほど我々は自分に呼びかけ、そして神に呼びかけるよりも切実に悲しい告白がしたくなる。然しそれは知性の自慰にすぎないのである。文学とは、告白のせつない愛撫に溺れないこと、その告白を書かないこと、その告白を抑へつけ、さうして遅しく出発するところから漸くはじまるのであらう。作家は誰しも孤独であらう。自ら孤独をいたはることは文学ではない。

寺岡峰夫「文芸時評」（「早稲田文学」第三卷第十一号、昭和十一年十一月一日）には、つぎのように記されている。

太宰治氏の「創生記」（新潮）は病的神経の狂躁譫だ。その狂躁のなかにチラチラと輝くものは作者の真実である。しかし此の真実は人生への真実ではない。焦躁する文壇意識の真実である。その上虚構の客観性が甚だ稀薄

だ。虚構も亦芸術でなければならぬ。これはデホルマシオンの文学ではなくて早や文学のデホルマシオンだ。「逆行」の作者にとっては甚だ残念である。

鳥勘三郎「新潮」（三田文学）第十一卷第十一号「十月の雑誌」欄、昭和十一年十一月一日）には、つぎのように記されている。

太宰治の「創生記」には、罵が多すぎる。が、案外、罵に陥ち込むのは、読者の側でなくて、作者自身であったりすることも、決して珍しいことではないのだ。太宰よ、如何？

佐藤春夫「芥川賞―憤怒こそ愛の極点（太宰治）―」（「改造」第十八卷第十一号、昭和十一年十一月一日）があるが、長文にわたるため、引用は省略する。ただし、この「芥川賞―憤怒こそ愛の極点（太宰治）―」に関する同時代評は、揭示しておく。

岡沢秀虎「文芸時評」（「早稲田文学」第三卷第十二号、昭和十一年十二月一日）には、つぎのように記されている。

佐藤春夫「芥川賞」／これは、この作中に書かれてゐるやうに、作者と太宰治とに関する「身辺雑記―事実そのまゝの小説」である。太宰治といふ一私人が「小説」とする価値ありと認識されて書かれたものである。（さうでなければこれを文芸作品として表現する筈がない）しかし、佐藤春夫氏のこの認識は、残念ながら、あまりにも個人的基準にしか立ってゐない。太宰治などは、この作に記されてあるやうな背徳者であるならば、その一事だけでもその多少の文学的才能などは社会的に抹殺されていいものだとは私は確信する。

名取勘助「小説月評」（「新潮」第三十三卷第十二号、昭和十一年十二月一日）には、つぎのように記されている。

「改造」―佐藤春夫の「芥川賞」は、これはよくこのままで理解されるものにはされようが、理解されないものには到底理解されない弱点を持つものである。或程度の文壇的知識を持つ者には、或程度まで理解はされること必定ながら、それは要するに或程度までである。この小説に書かれてゐない事柄もよく知ってゐるものにこそ、やや

作者の真意に近いところまでの理解が得られようか。評者はよくこの作品を理解し得ない人々の側に立つ者の如くである故に贅言を避ける次第。ただ、佐藤春夫の天衣無縫ともいふべき文章とその円熟せる才能とを提げ、堂々数十頁、世に問ふにあたり、斯かる小説を以てせしを遺憾とするのみ、識者は寧ひそかに鑑賞すべき乎。

山岸外史「太宰治の文学を論ず」（『三田文学』第十一卷第十二号、昭和十一年十二月一日）には、つぎのように記されている。

わが愚かなる兄と考へ、わが大馬鹿なる師と考へ、わが友と考へ、わが敵と考へ、わが好餌と考へてゐる好き指導者佐藤春夫は、この太宰治にみづから深く血族を感じながら、わがままで怠けもので骨の髄からの浪漫的性格であると喝破したのではあるが、しかし、その血族なるが故に、却って、太宰治の内面性をよく凝視しながら、それを解することの深いあまりに、これに時代としての文学的評価を与へることを忘れて了つたのである。喩へて言へば、自分と同じ道を歩いてきた或る若き同輩を認めた時に、いつでも人といふものは、そうして不足してゐる自分の五体に囚れて却って同じ種族を『理解』といふ形で軽蔑しやすいものだからでさへある。そして、最も悪いことには、そういう形で、屢々自分みづからをさへ軽蔑しやすいものだからである。／＼こういふことは、不幸にして誰にでもよくありがちなことである。すでに、軽蔑とは『理解』の別名に他ならぬものだからである。これは刹那のイロニイで永遠のアンティノミイである。人は、自分の縹緲のよさを讃め得るほど自惚れることは出来ないものだからでもある。同じ道同じ種族を考へ得るほど、文士相軽するのが常だからでもある。況してや、この羞情裕かな心理の作家佐藤春夫が、同じやうに羞情裕かな太宰治の客観的評価を忘れたといふことは、むしろ、作家の一面性として当然なところであつたといふより他はあるまい。私は、公平無私、冷静平等なる權威ある批評の精神を自我をもたなかつた立法者モーゼにさへ擬すべきであると考へてゐるのだが――。／＼少くとも、佐藤春夫は、太宰治をひとりの『人間』ひとりの『友人』として冷く語つたのではなく、自分みづからとの親近の評価をあたたく語

ったのである。何故かと言って、その道の危ないことをあまりにもみづからよく知ってゐたから。そして、それは、太宰治を認めたといふことよりも、太宰治に、自分みづからと同じ悪徳を認めたといふことなのに過ぎないのである。そして、それは、結局、ひとつの肉親的相剋を示すのに他ならないのである。要求してゐる自分に対して解答のない自分。永遠の心理の羞情。傭き人生。／（略）／——金色をした羽の鷺が、いま、文壇の圏外で、空高く闘かつてゐるのである。一羽は老醜して、その首にかかつてゐる金牌の重さに堪えかねて、少々もすると落ちかかる。早くあの金牌を捨てて呉れると闘ふのに都合がいいのだがと考へてゐる一羽の鷺は最も精悍で若々しい。なかなか眼も鋭いし嘴も鋭い。翼も潤達である。胸には、やっと、豆切手位の身軀らしい銅牌をつけてゐるのである。そして、一生、銅牌位で満足したいとも内々考へてゐる節もあるやうだ。（いや、よく考へて見ると、そうばかりでもないやうだ。）——けれども、また一羽の若い鷺は五十錢銀貨のやうによく光る銀牌を首にしたために、ますます、意識過剰になり、その銀牌をお月様位のもののやうに考へ違ひして、ひとりで狼狽し、落ちかかつては羽ばたきし、落ちかかつては羽ばたきしてゐる。誰れも、それほど問題にもしてゐないのだが、まことに見苦しくてみてゐられない。銅牌の鷺が横目で冷く嘲笑つてゐるのである。／そして、この三羽の鷺は、あまりに深く人生のことを考へ過ぎたために、何処へゆく目的もなく、心の中が真空と虚無と懈怠になり、その青空一面に羽をまき散らしながら、同志うちのやうに闘かったり撫であったり、突然、趣味のやうに喰ひついたりするものだから、世の中の盲目な批評家達は、『徒弟』とか『子弟』とか『出入り』とか、なんと考へてゐるやうだが、どうしてどうして、出入りどころか徒弟とところか、これ等の鷺はいづれも一国一城の主の化身なのであり、何れも喰ひ合ひの真最中なのであり、油断なく互ひに警戒し合つてゐるらしいのである。

「改造」（「三田文学」第十一卷第十二号「今月の雑誌」欄、昭和十一年十二月一日）には、つぎのように記されている。

「芥川賞」の佐藤春夫は問題作だ。太宰治といふ文学青年が芥川賞に外れたその前後にからまる自分の生活を私

小説風に覗いたものである。この種のものに対して決定的に動機が不純だと云へやう。ケチな根性で書いた小説とも云へやう。一応は飽くまで正しい批判である。何故ならそこに客観的な意味の標準が嚴存するからである。但し、それだけその批評は誰にでもなせる業である。同じ批評をやるならもっと我儘にやって貰ひたい。もっと肉体的にやって貰ひたい。照準よりも本能を解放して貰ひたい。動機を分析する前に生きたものを描いて貰ひたい。／＼閑話休題、匿名子がここで特に取り上げたいのはサブ・タイトルの「憤怒こそは愛の極致」といふテーマである。此のテーマは先月の林房雄の「アルバム」とは問題にならぬ程ロマンだ。但し、佐藤春夫の此の作品に関する限り愛の極致まで来てゐるか、どうかといふことは論外である。此種のコケオドカシはしばしば室生犀星の手とする所だが、犀星と春夫の違いは犀星にない生活の裏打ちが春夫にある点だ。春夫は此の作品で可成り勇氣を揮って自らなる裸身を示した。彼の輕蔑する所の文学青年の一人太宰治にかくまでも心を奪はれてゐること自体、春夫にとって如何に恥としてゐるか推察がつけばよろしく諸々の弱点は大目に見て可なりだ。此の際世評に抗して断として此の作品の本能に徹底しやうとする盲な人間性を見よと声を大きくする次第。

三波利夫「敗北者の群——文芸時評——」（「三田文学」第十一卷第十二号、昭和十一年十二月一日）には、つぎのように記されている。

佐藤春夫氏の「芥川賞」（改造）は、読みながら随分嫌な気がした。われわれの敬愛する詩人佐藤春夫氏が、こんな際物を書かなければならないとは何と言ふ悲劇だらう。氏は、自分は際物を書いたのではない、太宰治と言ふ男の異常な心理、及びかれを憎悪しながらなほ愛さざるを得ない自らの心理に興味を抱いたのだと言はれるかも知れない。しかし「芥川賞」には、そんな雰囲気はちつともない。山岸外史や堀口大学や太宰治がびよこびよこ躍り廻つてゐるだけで、こんなものが文学なら、僕は文学なんか廃業した方がいいと思ふ。殊に作中二度も、「これはお嬢さん育ちで女学校の作文がそのまま名門の令嬢たる特権で世に迎へられるやうな幸福をさうして一度その事

を反省すると自らの特権を自ら呪咀して左翼の論理に拝跪する善良無比なお嬢さん気質ではわかるまい。」と、中條百合子氏を攻撃してゐる條など、第三者でも腹が立つ。僕は先に「ふるさと」のときにも、氏の社会批判が見当外れであることを指摘して置いた。中條氏を云々する前に、太宰治とはそもそも如何なる人物か！地方の豪族の子に生れ、三十にもなつて家から百円近くも月々送金して貰つてゐる文学お坊ちゃんではないか、文は人である。僕は太宰治を否定すると共に、その文学をも否定する。たとひかれの才能がどんなに高いものであるにしろ、それが人間を低めるものである限り、僕にはそんなものは用無しだ。／思ふに、佐藤春夫氏の「芥川賞」に於ける態度は、一種のヒコボンデリーの発作である。文芸懇談会を脱退するとすねて知らぬ間に元の鞘に収つて見せたり、或ひは室生犀星氏と必要以上にいがみあつて見せたりしたもの、すべて同種類の心理的現象であらう。佐藤氏よ、「ふるさと」の佳調は、何処に置き忘れられたのか。

「六号雑誌」（「三田文学」第十一卷第十二号、昭和十一年十二月一日）には、つぎのように記されている。

佐藤春夫の芥川賞（改造）、かゝる作品を売らざるを得ざる春夫の苦衷を察すのみ。因、他にあらば罪まさに万死。嘗つては龍膽寺のM子への遺書師弟仲睦じきことにこそ。／われらは、作家佐藤春夫を尊敬す。然して、今や「芥川賞」をとらず。／かつて、所謂「既成文壇」崩壊に類したる事あり。そは「芥川賞」の如き、身辺小説の跳梁したためならずや。／新進作家出版記念会オンパレード。ねがはくば既成文壇への反抗の狼火たれ！

「付記」「新潮」十月号の「創生記」には、「——愛ハ惜シミナク奪フ。」のサブ・タイトルが付されている。

喝采・若草・十月特輯号、第十二卷第十号・昭和十一年十月一日発行・38～44頁・「小説」欄

『二十世紀旗手（版画莊文庫4）』（版画莊、昭和十二年七月二十日）に、全文が収載された。

『信天翁——太宰治文藻集——』（昭南書房、昭和十七年十一月十五日）に、全文が収載された。

『太宰治全集第三卷二十世紀旗手』（八雲書店、昭和二十三年七月三十一日）に、全文が収載された。

〔付記〕「若草」十月特輯号の「喝采」には、「手招きを受けたる童子／いそいと壇にのぼりつ」のサブ・タイトルが付されている。なお、同誌の北村秀雄「編輯後記」には、つぎのように記されている。「小説は、匂ひ高い筆で、めづらしくも同性愛を描く川端氏の『女学生』を初めとして、丹羽氏は、小娘ながらたくまשיき女性『湯の娘』。舟橋氏は、盛夏の海浜『水天紺碧』。荒木氏は女性インテリの『肉体の罌』。太宰氏は、いそいと壇にのぼりての『喝采』である。」

先生三人・文芸通信・十一月号、第四卷第十一号・昭和十一年十一月一日発行・10～11頁・「新人の感想」欄

関井光男蔵「太宰治の新資料」として、「無頼派の文学」（昭和四十三年一月十日）に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。

二十世紀旗手・改造・新年号、第十九卷第一号・昭和十二年一月一日発行・29～46頁・「創作」欄

『二十世紀旗手（版画荘文庫4）』（版画荘、昭和十二年七月二十日）に、全文が収載された。

『思ひ出―太宰治短篇傑作集―』（人文書院、昭和十五年六月一日）に、全文が収載された。

『猿面冠者（現代文学選23）』（鎌倉文庫、昭和二十二年一月二十日）に、全文が収載された。

『二十世紀旗手―太宰治短篇集―』（浮城書房、昭和二十三年五月一日）に、全文が収載された。

『太宰治全集第三卷二十世紀旗手』（八雲書店、昭和二十三年七月三十一日）に、全文が収載された。

〔同時代評〕高見順「時評の任務に就いて(5)―新進の脆弱―」（『中外商業新報』第一八三〇四号、昭和十一年十二月三十一日）には、つぎのように記されている。

文芸春秋でも改造でも、既成作家の方が立派な仕事をしてゐる。既成作家が新人より立派なのは当たり前だと言ふかもしれないが、その立派さは技術や修練の意味だけではない。たとひ腕は下手で、見てくれは悪くても、新しい時代感覚、現実認識と腕を組んだ新しい小説精神の澎湃たる圧力と輝きがあったら新人の面目は立つ。そこに既成

作家より新しい立派さが生じてくる。／＼ところが、文芸春秋の小田巖夫氏の「生きる人」と広津和郎氏の「心臓の問題」を比べてみると、古い広津氏の方が新しい小田氏より、ずっと新しい。小説的技術の点で脆弱なだけでなく、小説精神において新人がヘナヘナなのは悲しいことだ。太宰治氏の「二十世紀旗手」（改造）と、里見弴氏の「金」も同様だ。太宰氏の小説は所謂新時代の人たちに「新しい」として持て囃されてゐるらしいが形体が変わつてゐることによって、小説が新しいとは言ひ難いのである。更に太宰氏は形体上の破壊的曲芸者といふより小説といふものをそもそも否定する精神で書いてゐるのだ。そこには小説的精神は無い。無は新ではない。それ故、新しさも旧さもないとも言へる。／＼太宰氏のあとに里見氏の「金」を読んで、これが即ち小説だとホッと救はれる感じがするとはなんと口惜しい事実であらう。新人の新しさは里見氏などのこの小説的大道での一歩前進でなくてはならない。否定や逸脱による横町での「新しさ」は悲しい脆弱の一種と見られる。

沢西健「浪曼派随想」（「日本浪曼派」第三卷第四号、昭和十二年五月一日）には、つぎのように記されている。

太宰治の「二十世紀旗手」をよみ、ところどころで他の人の作品にみられず妙に涙ぐませられ、身につまされてならなかったが、僕は太宰治氏に健康回復に際してもうひとつ、「思ひ出」とか「葉」のやうな美しいロマンを書いてよましてもらへるやうに希望する。「葉」の花売娘の場面など誰でも愛誦措かざるものであらう。「若草」の小品はたいへん面白かった。

〔付記〕「改造」新年号の「二十世紀旗手」には「——（生れて、すみません。）のサブ・タイトルが付されている。なお、同誌には、「序唱。神の焰の苛烈を知れ。」29頁、31頁、「春唱。ふくろふの啼く夜かたはの子うまれけり。」31頁、32頁、「弔唱。段数漸減の法。」33頁、「参唱。同行二人。」33頁、34頁、「四唱。信じて下さい。」34頁、36頁、「五唱。嘘つきと言はれるほどの律儀者。」36頁、37頁、「六唱。ワンと言へなら、ワンと言ひます。」37頁、39頁、「七唱。わが日わが夢。——東京帝国大学内部、秘中の秘。」39頁、「八唱。憤怒は愛慾の至高の形貌

にして、云々。」39〜42頁、「九唱。ナタアリヤさん、キスしませう。」42〜43頁、「十唱。あたしも苦しゅうございます。」43〜44頁、「終唱。さうして、このごろ。」44〜46頁と、所載されている。

「二十世紀旗手」断片（仮題）・昭和十一年九月上旬〜十一月下旬頃記

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十一年九月二十日）に、全文が収載された。

〔付記〕「二十世紀旗手」の「七唱。わが日わが夢。―東京帝国大学内部、秘中の秘。―」は、「（内容三十枚。全文省略。）」となっている。この断片は、その「三十枚」の裡の一部分と推測される、未完成の断簡である。

音に就いて・早稲田大学新聞・第六十号・昭和十二年一月二十日・六頁

『信天翁―太宰治文藻集―』（昭南書房、昭和十七年十一月十五日）に、全文が収載された。

『太宰治随想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文が収載された。

『もの思ふ葦太宰治全集第十六巻（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文が収載された。

あさましきもの・若草・三月号、第十三巻第三号・昭和十二年三月一日発行・52〜54頁・「春のオーヴァチュア」欄

『太宰治全集第十二巻』（筑摩書房、昭和三十三年九月二十日）に、全文が収載された。

〔付記〕「若草」三月号の「院さましきもの」には、「賭弓のりゆみに、わななくく久しうありて、はづしたる矢の、もて離はなれてことかたへ行きたる。」のサブ・タイトルが付されている。なお、同誌の北村秀雄「編輯後記」には、「特輯コントは『春のオーヴァチュア』五篇。華麗なる季節の序曲。」と記されている。

HYMAN LOST・新潮・四月号、第三十四年第四号・昭和十二年四月一日発行・181〜205頁・「創作」欄

『東京八景』（実業之日本社、昭和十六年五月三日）に、字数にして一千字以上削除され、二十数箇処書き改められた形で、収載された。

『狂言の神（三島文庫）』（三島書房、昭和二十二年八月三十日）に、改削稿が収載された。

『太宰治全集第三卷二十世紀旗手』（八雲書店、昭和二十三年七月三十日）に、改削稿が収載された。

『二十世紀旗手太宰治全集第三卷（近代文庫69）』（創芸社、昭和二十八年六月一日）に、改削稿が収載された。

『太宰治全集第二卷』（筑摩書房、昭和三十年十一月二十日）に、全文が収載された。

〔同時代評〕河上徹太郎「文化月報—小説—」（『文学界』第四巻第五号、昭和十二年五月一日）には、つぎのように記されている。

太宰治氏の「*Human Lost*」は病院生活の記録であるが、字義通り病的である。早く此の境地を脱出することを望む。

「新潮」（三田文学）第十二巻第五号「誌界展望」欄、昭和十二年五月一日）には、つぎのように記されている。

創作は、葉山嘉樹「出発」、井伏鱒二「取立屋」、柳山潤「サル蟹合戦」、太宰治の「*HUMAN LOST*」、緒方隆士の「若年の記録」——以上の五篇である。／今さら、この人たちに、野心的なれ／とのぞむのは、こちらが野暮と云ふものであらう。（略）／太宰治のものは、もう沢山だといふ感じた。いつもいつも同じ発作で字を書いてゐるといったところ、変った意味で北條民雄の小説を読んだ後のやうに巧ければ巧いだけ後口が悪い。

〔付記〕「新潮」四月号の「*HUMAN LOST*」には、「思ひは、ひとつ、窓前花。」のサブ・タイトルが付されている。

解題・虚構の彷徨、ダス・ゲマイネ（新選純文学叢書）・新潮社・昭和十二年六月一日発行・1頁

『太宰治全集第一巻』（筑摩書房、昭和三十年十月二十日）の「後記」に、一部分が紹介された。

山内祥史編「太宰治批評スクラップ（Ⅲ）」（『太宰研究』第三号、昭和三十八年一月二十日）に、全文が紹介された。

〔付記〕全集未収録。なお、この「解題」の署名は「編者」となっていて、太宰治以外の人が書いた形式をとっている。しかし、「作者」の「言」も引用されていて、すくなくともその部分は、太宰治の手に成るものと断定しうる。

と思われる。

檀君の近業について・日本浪曼派・九月号、第三卷第七号・昭和十二年九月一日発行・36頁

『もの思ふ葦太宰治全集第十六卷（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文が収載された。

澄籠・若草・十月号、第十三卷第十号・昭和十二年十月一日発行・34～39頁

『女性―創作集―』（博文館、昭和十七年六月三十日）に、全文が収載された。

『信天翁―太宰治文藻集―』（昭南書房、昭和十七年十一月十五日）に、全文が収載された。

『太宰治全集第三卷二十世紀旗手』（八雲書店、昭和二十三年七月三十一日）に、全文が収載された。

思案の敗北・文芸・十二月号、第五卷第十二号・昭和十二年十二月一日発行・132～134頁・「隨筆」欄

『もの思ふ葦太宰治全集第十六卷（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文が収載された。

創作余談・日本学芸新聞・昭和十二年十二月発行

『信天翁―太宰治文藻集―』（昭南書房、昭和十七年十一月十五日）に、全文が収載された。

『太宰治随想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文が収載された。

『もの思ふ葦太宰治全集第十六卷（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文が収載された。

『付記』未確認。発行日、号数、所載面等は、不明である。

他人に語る・文筆・二月号・昭和十三年二月一日発行

『信天翁―太宰治文藻集―』（昭南書房、昭和十七年十一月十五日）に、「『晩年』に就いて」と改題して、全文が収載された。

れた。

『太宰治随想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文が収載された。

『もの思ふ葦太宰治全集第十六卷（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文が収載された。

〔付記〕未確認。所載頁等は、不明である。

一日の労苦・新潮・三月号、第三十五年第三号・昭和十三年三月一日発行・135～137頁・「日記」欄

『信天翁―太宰治文藻集―』（昭南書房、昭和十七年十一月十五日）に、全文が収載された。

『太宰治随想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文が収載された。

『もの思ふ葦太宰治全集第十六卷（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文が収載された。

多頭蛇哲學・あらくれ・五月号、第六卷第五号・昭和十三年五月一日発行・27～29頁・「随筆」欄

『信天翁―太宰治文藻集―』（昭南書房、昭和十七年十一月十五日）に、全文が収載された。

『太宰治随想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文が収載された。

『もの思ふ葦太宰治全集第十六卷（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文が収載された。

〔付記〕「あらくれ」五月号の菊子「編輯後記」には、「本号には思ひの外多数の方たちが御執筆下さいまして、御覧の通りの盛観です。初めての芽野蕭々、張赫宙、和田伝、太宰治の四氏、及び二回目の福田清人氏に厚く御礼を申上ます。」と記されている。

答案落第・月刊文章・七月号、第四卷第七号・昭和十三年七月一日発行・40～41頁・「私の小説修業」欄

月刊文章編輯部編『わが小説修業』（厚生閣、昭和十四年十月十八日）に、全文が収載された。

『信天翁―太宰治文藻集―』（昭南書房、昭和十七年十一月十五日）に、全文が収載された。

『太宰治随想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文が収載された。

『もの思ふ葦太宰治全集第十六卷（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文が収載された。

〔付記〕所載欄、「月刊文章」七月号の「目次」では、「わが小説修業」欄となっている。

緒方氏を殺した者・日本浪漫派・八月号、第四卷第三号・昭和十三年八月一日発行・12～13頁

『信天翁—太宰治文藻集—』（昭南書房、昭和十七年十一月十五日）に、全文が収載された。

『太宰治随想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文が収載された。

『もの思ふ葦太宰治全集第十六卷（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文が収載された。

一歩前進二歩退却・文筆・八月号・昭和十三年八月一日発行・8～9頁・「随想」欄

『信天翁—太宰治文藻集—』（昭南書房、昭和十七年十一月十五日）に、全文が収載された。

『太宰治随想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文が収載された。

『もの思ふ葦太宰治全集第十六卷（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文が収載された。

〔付記〕「文筆」八月号の「(K)」の「編輯後記」には、つぎのように記されている。

「太宰治氏以下十三家の名文章を頂きました。何れも若き意気に溢れたもので、その冷徹さは猛暑克服の一助となると信じます。何卒、御愛読下さい。」

姥捨・新潮・十月号、第三十五年第十号・昭和十三年十月一日発行・17～35頁・「創作」欄

『女性徒—短篇集—』（砂子屋書房、昭和十四年七月二十日）に、全文が収載された。

『姥捨』（ポリゴン書房、昭和二十二年六月十日）に、全文が収載された。

『太宰治全集第三卷二十世紀旗手』（八雲書店、昭和二十三年七月三十一日）に、全文が収載された。

〔同時代評〕古谷綱武「個性のない作家—十月号の文芸時評（二）—」（「信濃毎日新聞」第二〇二五八号、昭和十三年九月三十日）には、つぎのように記されている。

個性的といふ点では、若い時代では、太宰治や高見順の出現は、一種の新鮮な魅力を、青年の間に投げた。／太宰治の創作集「晩年」は、昭和の青年を代表する、ひとつの名著といふことができる。しかしその後を書いてゐた妙な暴露小説めいたものには感心できなかった。あの荒廃は私を唖かした。今日の「姥捨」（新潮）はさういふ荒

廃から立て直らうとしてゐるもので、心中しようとしてゐる切ない夫婦を扱つてゐる。しかし色あせて、ここに昔日の面影は見られない。この方向には賛成であるが「姥捨」は失敗作だ。純文学の魅力といふ点で、なにげない軽井沢の一挿話を書いた川端康成の危げのない小話「百日堂先生」（文芸春秋）に及ばない。とりあげるほどのものではないがこの小品には好感がもてた。

武田麟太郎「小説精神の探究—文芸時評—」（「文芸春秋」第十六卷第十九号、昭和十三年十一月一日）には、つぎのように記されている。

今日出海氏の二つの作品、「秋の歌」（文学界）と「勝負」（文芸）を読んで、意外なばかりの巧みに感嘆したが、それでもやはり、前述と同じやうな不満を禁じ得なかった。それに反し葉山嘉樹の「慰問文」（文芸）川端康成氏の「百日堂先生」（文芸春秋）または太宰治氏の「姥捨」（新潮）などの、小説としては何かの懷疑に圧されて面倒臭くなり、投げかかつてゐるものが観取出来る小説と比較してみればよく解るのである。こちらには哀しくも愛でたい玄人が住んでゐるのではないか。葉山嘉樹氏は、恐らく稀にみる天成の人であらう。「ズボラ」の境地には先づ誰でも入れるとしても、そこでこれだけ生きた文字を綴るのは、もう誰でも可能だと云へない。太宰氏が、若気のあやまちとしての分裂精神を踏み越えて来たのは注目値する。まやかし者の印象を与へてゐた作家だが、この頃は汚名を濯ぎはじめたと思ふ。

神田鶴平「創作時評」（「新潮」第三十五年第十一号、昭和十三年十一月一日）には、つぎのように記されている。

太宰治の「姥捨」は話上手でもあり、名文でもあるが、とりとめのない心中未遂物語といはれても、仕方がなさうなものだ。水上の温泉宿でのかず枝は、心憎いほどよく描かれて、ちょっと楽しめるが、なにしろこの小説の根柢がしっかりしてゐないので、全体としての実感がびったり来ない。

三戸斌「創作月評」（「文芸」第六卷第十一号、昭和十三年十一月一日）には、つぎのように記されている。

『姥捨』 太宰治 近代的頹廢に蝕まれて既に精神的な晩年を感じて生きる方向を喪つてゐる主人公は、貞操を破つた妻に対する氣持の上の不憫さがどうしても拂ひのけられぬところから、合意心中を決行するのであるが未遂に終り、生き返ると同時にその氣持が卒業出来、常識人として生きる道に活路を見出すといふのである。棘の無い文章で鮮に描かれてゐるので、妙なからず切迫感を無くしてゐる。籠つたものが無くなつてゐるのだ。それから実感よりもポオズが眼に附くのが厭味である。しかしながら、一面子供のやうな無邪氣さを持った野性味の勝つた女主人公は、割りにイキイキと描かれてゐた。

谷崎精二「十月の創作壇―文芸時評―」（『早稲田文学』第五卷第十一号、昭和十三年十一月一日）には、つぎのように記されている。

太宰治氏の『姥捨』にはやはり作者自身らしい主人公が出て来る。此の主人公は水上温泉で薬を飲んで夫婦心中を企てるのである。どうして死なねばならないのか、前後の事情が示されていないが、それは大した不満にならない。書かれた場面と情感とは悉く生きてゐる。此の非常時にこんなだらけた生活を描いて何になると云ふ様な非難が出るか知れないが、（不思議にかう云ふ非難の声を発するのは文壇の外の人でなくて、内の人である。読者は文芸作品に対してもっと謙虚である。）作品に湛へられた真実が胸に迫るものがある。

「新潮」（『三田文学』第十三卷第十一号「今月の小説」欄、昭和十三年十一月一日）には、つぎのように記されている。

姥捨 太宰治／いつもと調子のちがったもので、あたりまへな書き方が、すらすらと読ませる。だが、太宰の持つ韻律といふものが、おちついて来て、わるく言へば味がうすれて来て、それだけ弾力といふか、調子の高さといふか、さうしたものを失ひつつあるやうな作品である。この作者は巧みな語り手であり、ロマン造りの選手であつて、読者は手もなく化かされることがある。贋物がまぢることもあるのだ。この作品の中でもさうであるやうに、彼がいつも自分をこづきまはすことが、真劔で激しければ激しいだけ、それだけ早くその境地から出発できるので

あらう。いつまでもこれが続いていることは、僕等にとっての疑懼を抱かせるのである。逆の真理もありうるからだ。

満額・文筆・十月号、「短篇特輯」・昭和十三年十月一日発行

『女生徒―短篇集―』（砂子屋書房、昭和十四年七月一日）に、全文が収載された。

『富嶽百景』（昭和名作選集⑧）（新潮社、昭和十八年一月十日）に、全文が収載された。

『晩年（養徳叢書15）』（養徳社、昭和二十一年四月二十日）に、全文が収載された。

『水仙（文芸春秋選書4）』（文芸春秋新社、昭和二十三年七月二十日）に、全文が収載された。

『女の決闘（太宰治代表作集）』（新潮社、昭和二十三年七月二十日）に、全文が収載された。

『太宰治全集第三卷二十世紀旗手』（八雲書店、昭和二十三年七月三十一日）に、全文が収載された。

〔付記〕未確認。所載面等は、不明である。

富士に就いて・国民新聞・第一六八三四号・昭和十三年十月五日発行・1面・「随想」欄

『もの思ふ葦太宰治全集第十六卷（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文が収載された。

校長三代―弘前―校長検事局へ行く―・帝国大学新聞・第七百三十八号・昭和十三年十月三十一日発行・8面・「高校

今昔の横顔16」欄

『太宰治随想集』（若草書房、昭和二十三年三月二十一日）に、全文が収載された。

『もの思ふ葦太宰治全集第十六卷（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文が収載された。

女人創造・日本文学・十一月号、第一卷第七号・昭和十三年十一月一日発行・34～35頁

「太宰治研究」第七号（昭和四十年九月十九日）に、「△新資料▽」として、全文が紹介された。

『太宰治全集第十二卷』（筑摩書房、昭和四十三年二月十五日）に、全文が収載された。

九月十月十一月〔上〕御坂で苦慮のこと・国民新聞・第一六八九八号・昭和十三年十二月九日発行・6面・「学芸」欄

『もの思ふ葦太宰治全集第十六卷（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文が収載された。

九月十月十一月〔中〕御坂退却のこと・国民新聞・第一六八九九号・昭和十三年十二月十日発行・6面・「学芸」欄

『もの思ふ葦太宰治全集第十六卷（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文が収載された。

九月十月十一月〔下〕甲府偵察のこと・国民新聞・第一六九〇〇号・昭和十三年十二月十一日発行・6面・「学芸」欄

『もの思ふ葦太宰治全集第十六卷（近代文庫23）』（創芸社、昭和二十七年七月一日）に、全文が収載された。

〔追記〕この稿を草するに際して、つぎの諸氏、諸図書館、諸社の助力を得た。記して謝意を表する。

青山毅氏、北根豊氏、関井光男氏、谷沢永一氏、津島美知子氏、徳田一穂氏、韭沢謙氏、野口武久氏、肥田皓三氏、源高根氏、山田正一氏、渡部芳紀氏、池田文庫、大阪府立図書館、県立長野図書館、神戸女学院大学図書館、国立国会図書館、昭和女子大学近代文庫、東京大学附属図書館、東京大学明治雑誌新聞文庫、東京都立大学附属図書館、日本近代文学館、早稲田大学図書館、東奥日報社、審美社。

Shoshi Yamanouchi

A Bird's-Eye View of the Works Composed

by Osamu Dazai

(1936~1938)

Résumé

The present collection comprises all of what Osamu Dazai (1909~1948) ever wrote and his utterances recorded at the meeting of joint criticisms of contemporary literary works or round table talks, placing emphasis on recording how these writings and utterances were sent to print.

At the same time, efforts were made to include descriptions of those contemporary magazines, etc. which either printed the late writer's works, or just offered their pages to introduce them in part until the time when they were eventually incorporated in the "Complete works of Osamu Dazai," this being for the purpose that this edition may possibly help those desiring to make reference on the said "Complete Works" in relation to certain paragraphs or passages in the original writings still in the form of manuscripts.

Space was given also to such criticisms which appeared concerning Dazai's literature, confining them strictly to such portions as directly dealt with the late writer's works.

In "Additional Note," allusion was made to such works of Dazai as fragmentary publication only has so far been made and those which failed to be printed in "The Complete Works." It also includes "notes" and "remarks" related to the works as well as those connected with their first publication and other utterances insofar as they related to the unique literature of Dazai.